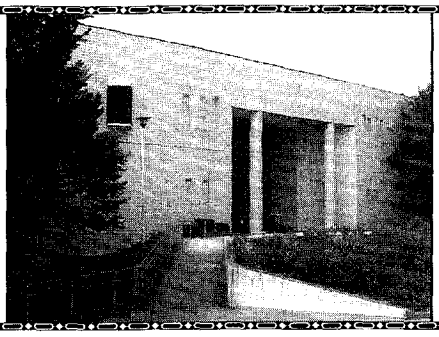
福島大学附属図書館報

書燈

No. 26

2001. 4. 1 発行

〒960-1293 福島市金谷川1番地
TEL (024) 548−8083
http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/
福島大学附属図書館



海外旅行で図書館へ行く

行政社会学部 大 黒 太 郎

海外旅行に出発する前に、下調べのために図書館を訪ねるという人はいるかもしれませんが、海外旅行中にわざわざ現地の図書館に出かけて行くという人はあまりいないのではないでしょうか。僕はヨーロッパの大都市を一日中歩き回るのが趣味で、新しい町に着いてホテルを決めると、真っ先に動物園と図書館に向かいます。動物園では、その町の子供のいる家庭と老夫婦の姿が、また図書館では学生の姿が、ふつうの生活というかたちで感じることができます。動物園と図書館を経験して、その町で生活する普通の市民たちに溶け込んでみると、なぜだかここが自分の町であるような気がしてきて、すぐに好きになってしまうのです。

先日、オーストリアのウィーンに出かけました。繁華街ケルントナー通り周辺は、オペラやフィルハーモニー、シュテファン大聖堂やシュトラウスの銅像、美術史博物館など旅行者が集まる施設がまとまっている地区で、その中心となる王宮の敷地内にオーストリア国立図書館があります。外観は重厚な建物ですが、内部は機能的に整備されていて受付は高級ホテルのフロントのような雰囲気です。ここからがいつも僕が使う手なのですが、怪しげなドイツ語でパスポートを預けて机の予約をし、なんとか適当な本を借り出すことに成功すると、あとはもうウィーン大学の学生が悠然と勉強をしている、というふりをしてみるのです。しばらくの間は本を読み、メモをとっているふりを続けますが、お腹がすけばカンティーネ（食堂）に出かけてみます。図書館周辺のホテルやレストランの旅行者向けの値段より格段に安い額で、旅行者が滞在中一度は食べるシュニッツェルがサラダとデザートつきで食べられます。もちろん手には現地の新聞「Der Standard」です。ここでも悠然としていることが大切です。食事が終われば昼休みの時間。海外旅行で犯罪に巻き込まれたという話はよく耳にしますが、図書館はいわば「安全地帯」です。旅行者や貧乏な学生を狙って図書館にやってくるスリはまずいないので、図書館では安心して昼休みができます。立派なソファーが並んでいる上、館内は非常に静かですから密度の濃い昼寝が可能です。再び真面目なウィーン大学生のふりをするのも飽きたころ、今度はカフェに出かけます。ここは学生達でいっぱいですが、よくよく観察しているとカフェは恋愛の相手を探して声をかける格好の場所になっているらしいことに気が付きます。図書館にはこんな役割もある、ということに初めて気が付いたのは、ドイツ・ベルリンのポツダム広場脇にある国立図書館でした。大学の試験期間中は同じ人に何度も図書館で会うことになり、だんだん仲が深まっていって、「試験が終わったら映画にでも」ということになる（らしい）。ウィーンはベルリンよりは控えめという感じでしたが、あちこちと飛び交う視線はベルリンで感じたものと同じだったのです。図書館の活用法のひとつと言えますね。

留学するならともかく、一つの町に数日間滞在するだけの海外旅行でその町の学生や家庭の普通の生活を目にすることは難しいものです。ですから、せめて現地学生のふりをして図書館で半日を過ごしてみるというのも楽しいのではないでしょうか。あの飛び交う視線が会話に発展し、現地の学生が実際に町を案内してくれる、ということも稀ではないようです。海外旅行に出てその町を好きになるにはいろいろな工夫が考えられるでしょうが、そのひとつに図書館を利用するということもありうる、と思うのです。

午後七時を過ぎて帰り支度を始める人がだんだん増え始めた頃、僕も荷物をまとめて外に出ることにしました。近くのサウナを探し出し汗を流した後、地下鉄に乗って夜遅くまで開園している郊外遊園地のプラーターまで出かけました。観覧車に乗って今日一日の充実感を感じながらウィーンの森を眺めていると、靴音の響くこの町にまた来たいと思ったのでした。

「大塚文庫」のこと

経済学部　樋口　　徹

「大塚文庫」というのは、1996年に89歳で亡くなられた大塚久雄氏が所蔵されていた書籍約6,000冊を中心とし、ノートや講演の録音テープその他の関係資料をひとまとまりにして、図書館にある一般の書籍・資料などとは違う、特別の扱いをするようにしたものである。いま4年がかりの整理も終わり近く、この秋には公開されると聞く。

大塚久雄という人はどういう人か。形式的なことをいえば、昔は東大でもほとんどいなかった数少ない経済学博士、東大教授、停年後は国際基督教大学。文化功労章、文化勲章および朝日賞を受けられた人。日本の西洋経済史学を戦後一挙に国際的にも卓越した水準に高めた人。1950年代のいわゆる「移行論争」でその真価が国際的に認められ、著作集全13巻、等々。しかし型通りの紹介をしても面白くないだろうから、関心のある人には最近いくつか出ている日本史辞典を引くとか、もう少し学問的なことを知りたい人には、中公新書にある桑原武夫編『日本の名著』（ちなみに、これが中公新書の最初の本で、1という番号がついている）、樺山紘一編『現代歴史学の名著』、あるいは、講談社学術文庫と岩波現代文庫に2、3点ずつ入っている比較的小さな著書に付けられた解説を読むことをすすめる。どれも相当の人が苦労して立派な解説を書かれている。

しかし、僕にとっては何より自分が先生とした人である。それも、たまたまそういうことになったのである。僕は、この人の『近代欧州経済史序説』という本を、1956年、大学2年の時に西洋経済史の試験のために読んで、歴史というものは暗記するものなどではなくて、理解するもの、理解できるものだということを発見し、それまで面白くなかったものが面白くなって、3年に進学するとおそるおそるゼミに入れて頂き、ますます面白くなって大学院にも行き、とうとう大学教師にまでなってしまった。そしてこの3月にはめでたく65歳の停年退職を迎えるのだから、僕の一生は、この人の1冊の本とのたまたまの出会いによって方向づけられたといってよい。僕はこの人を先生としてもったことをとても幸せに思い、また誇りにも思っている。

東大の大塚ゼミの同窓会を「ヨーマン会」というが、そのヨーマン会の幹事の1人から突然電話があって、大塚先生のご遺族が、先生の蔵書をばらばらに散逸させたくないのでどこか一括して寄付できるところはないかと探しておられる、福島大学でどうか、と打診を受けたのは、多分、先生が亡くなられてまだ数ヶ月という時だったと思う。それは光栄だが、大塚門下生としてはもったいない。東大か、少なくとも東京近辺のもっとみんなが利用しやすいところに引き受けてもらった方がよい、それに福島大学は現在書庫には余裕ができているが、「文庫」はつくらないというきまりにいつの頃からか変わっていて、もとあった日本経済史の藤田五郎さんの生前の蔵書でつくった「藤田文庫」もいつのまにかばらばらに解体されてしまっているくらいだから、といったが、幹事の人はなかなか引き下がらない。東大は、書庫がきつくなっているから、ない本だけ抜き出してなら頂きたいが、一括では受け入れられないというし、国際基督教大学も書庫と整理の人手と費用の問題があって無理だそうだ。あちこち当たってみてはいるが、どこも同じような事情だ、という。人手と費用の問題は福島も同じで、小さな大学だからほか以上に厳しいだろうといっても、まだ、碩学の大塚先生の蔵書だぞ、とか、ゾンバルトやウェーバーの本が何冊もあったぞとか、いろいろ僕を誘惑しようとする。しかし、僕は今の綜合図書館ができた時に経済学部の図書委員長をしていて、規程作りにも参画していたし、つい最近、図書館長もつとめ終わっていて、図書館の事情もきまりもよくわかっていたから、一括引受けはまだしも、「文庫」は無理だ、もっとほかの良い所を探してみてほしいと答えた。

翌日、図書館に行って、僕の後に館長をしていた教育学部の渡辺義夫さん（その後、館長を終わった後で、金谷川駅前で不運にも交通事故にあって亡くなられた）に、こういう打診があってこう応対しておいたと報告した。ところが、ここから急に話が大きく変わってくるのである。大塚久雄といえば、専門違いの自分でも名前を知っているぐらいの人で、そういう人の旧蔵書を頂くなど、願ってもない幸せだ、「文庫」はつくらないというきまりがあるとしても、例外があってもよいのではないかと、大車輪で動き出された。そしてしばらくの内に、図書館職員たちの了解をとり、学長からも費用などの点では協力するという約束をもらい、「大塚文庫」をつくるという形で受け入れたい、という方針を僕に伝えられた。「ヨーマン会」の幹事は大変喜んだ。僕も、大変だな、少しもったいないな、とは思ったものの、それでもうれしい気持ちがした。図書館協議会で最終的に受け入れが決定された時、僕もいわば参考人としてそこに出席し、協議会終了後、館長室で酒を一杯所望した。

さてそれからがまたいろいろ大変だった。普通の古書の受け入れとは違って、1冊1冊中を調べ、書き込みやアンダーラインの有無をチェックし、それを目録に記載しようというのである。大塚久雄という人を、あるいは「大塚史学」と呼ばれるその独創的な経済史学を、社会科学史的ないしは思想史的に研究しようという人がいるならその役に立つような目録を作りたい、というわけである。図書館専門員の渡辺武房君は、数年間この仕事にほとんどかかり切りになった。ご遺族からは、蔵書を寄贈して頂いたばかりでなく、整理の費用にと、数年間にわたって数百万円の寄付まで頂いた。そのようにして、もうしばらくすれば目録も印刷され、「文庫」も公開されるというところまで、やっと来たのである。

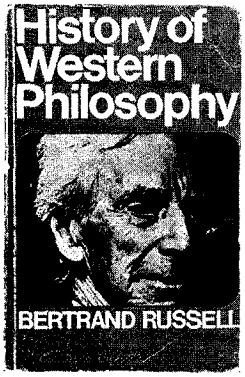
1冊1冊をチェックする準備作業は、本学にいる弟子、孫弟子、イギリス史に関連する研究をしている人など数人が当たったが、その仕事をしていて驚嘆し、ほとんど感動したといってよかったことは、大塚先生はただ沢山の本を読まれたというのではなく、これという本は何度でもくり返して徹底的に読みこまれていたことである。そういう本の場合は、書き込みやアンダーラインなどは、鉛筆やペンがいりまじり、一見して何度も重ねて書かれたことがわかるし、表紙もすり切れ、ちぎれそうになっている。中には表紙はとれ、本体の方もほとんどバラバラにこわれているものさえある。マックス・ウェーバーの宗教社会学論集（もちろん原書）がその典型である。ウェーバーの本の中には、まっくろに汚れたものからまだ新品のものまで、同じ本が2セット、3セットとあるものもある。「韋編三絶」という言葉があるが、竹簡を綴った革紐が三度切れてしまうまで読み込むという意味で、まさにそれである。ああ、これだけ読みに読まれたから大塚先生がウェーバーのことを話されるとき、ウェーバーがそういっているのか大塚先生がそういっておられるのか、よくわからなくなって、「……とウェーバーはいっているんですよ」といわれてやっと、ああやっぱりウェーバーだったかとわかるということがよくあったのだ、と納得できたのである。そういう人の本が「大塚文庫」をなしているのである。

思い出の一冊

思い出の一冊

経済学部　柴原哲太郎

バートランド・ラッセル（Bertrand Russell）は、アインシュタインとの世界平和運動でも良く知られていますが、私の思い出の一冊は、このラッセル卿の「西洋哲学史」（History of Western Philosophy）です。未だ完全に読み通していないし、人生の折々に御世話になっている本ですから、正確に言えば“思い出の”本ではありませんが、青春の日々に思索する楽しみを教えてもらった本という意味で「思い出の一冊」です。



大学一年の頃に、クラブの合宿の折りなどに先輩たちが難解な哲学用語を交えて議論しているのに触発され、わからないままに文学書や哲学書を種々手にとっているうちに出会ったのがこの本でした。その序章が素晴らしく、科学と宗教の狭間にある哲学の意味と意義とを明快に説明してあって、“本当にそうだ”と読んでいるうちにこの本の虜になりました。

最初に買ったのは市井三郎さんの日本語訳で3冊本であったと思いますが、当時の本は大学卒業時に友人にあげたようです。今手元にあるものはGeorge Allen & Unwin Ltd社から改訂第2版として1961年に出版された英語のペーパーバック1冊本です。私の書き込みからみて、博士論文を書いている時にトマス・アクィナスの章を参考にするためにトロントで求めたものだとわかります。

日本語の哲学用語は難しいので哲学の本は原文で読んだ方がかえって分かり易いといわれますが、特に論理哲学者であるラッセル卿の文章は論理的であり平明でとても読みやすいように思います。この西洋哲学史もユーモアのある文章などは英語を読む楽しさも感じさせてくれます。

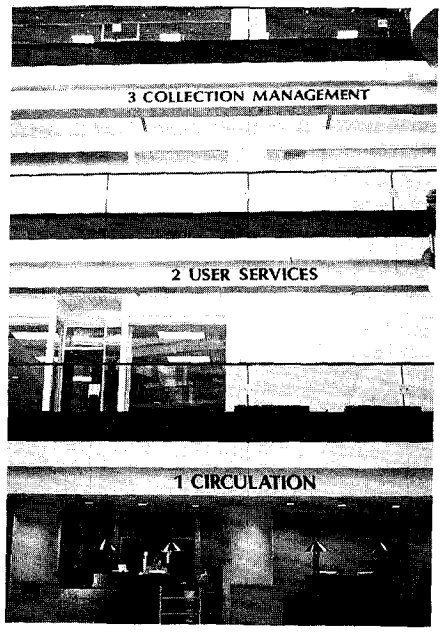
この頃は厳しい世相を反映して、実用的な資格を取らせるなど、生きて行く術（すべ）を身に付けさせる教育が大学でも必要だとの議論もあり、卒業後の糊口の手段はとても大事だと思いますが、学生時代をもう一度送れといわれれば、やはり私はラッセル卿の本などを読み、「宇宙のなかの孤独な自己存在の意味」などを考えて過ごしたい気がします。

アメリカ大学図書館事情

ミドルテネシー州立大学　大学図書館を訪ねて

情報管理係　白田真紀子

図書館に踏み入れたとき、4階まで貫かれた吹き抜けの明るさと、回廊に掲げられたセクションの標識に目を奪われました。左手には貸出・返却カウンターが並び、右手にはレファレンスコーナー、中央4台のエレベーターの奥には雑誌コーナーが広がっていました。



ロビーと貸出・返却カウンター

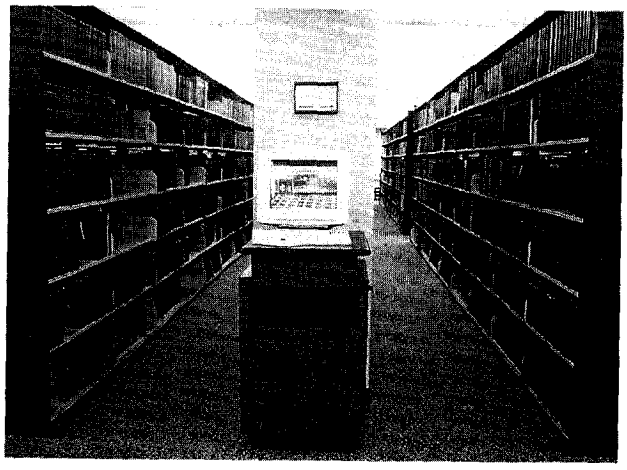
平成13年2月4日から11日まで学術振興基金による海外研修事業によりアメリカのミドルテネシー州立大学（MTSU）を訪問しました。1999年にたてられたばかりの大学図書館は800,000冊の図書を開架式書架に並べることができ、1,500の閲覧席、43のグループ学習室、1,000席の個人貸出机、60の研究者用個室、350台のコンピューター、60のマイクロフィルムステーション、合計100席の2つの図書館指導用教室が備わっていました。入り口の近くにレファレンスなどのカウンターやコンピューター、コピー室、奥に研究者用個室や個人貸出机を配し、入り口から奥に行くにしたがって静かな落ち着いた環境で勉強できるようにしたという館長の説明がありました。何がどこにあるのか、どこに行けば自分の求めるものが見つけられるのか一目瞭然の標識と、雑誌の近くにコピー室を配し、書架の随所に検索用のコンピューターを備え付けるなど、利用する側の行動を予測し無駄のない配置に収められていることに感動を覚えました。設計の段階から図書館職員の意見が積極的に取り入れられたということでしたが、書架に間接照明を配備するという些細な点にも細やかな気遣いが感じられました。

全面開架式の書架は、随時学生スタッフが書架整理をしており、余裕のある書架スペースとあいまって図書が探しやすくなっていました。また、レファレンスカウンターには月～木の朝8時から夜10時まで、金・土曜日は8時から夕方5時まで、日曜日は午後1時から夜10時まで必ず図書館職員がカウンターにいるようにローテーションが組まれていました。さらに、MTSUは遠隔地授業も行っています。そのような学生に対しても、遠隔地にいながら図書の貸出やレファレンスなどのサービスが受けられるよう図書館として配慮しています。もちろん身体障害者に対しても同様で、テキストをスキャナーで読み込んで音声に変換する機器などが入り口近くの部屋に確保されていました。私が滞在している間にも、さまざまな障害をもつ学生がキャンパスを行く姿をたくさん見かけました。

渡米前にMTSU大学図書館のホームページを調べ、電子図書館としての機能も含めインターネットを使ったサービスが充実していることは知っていましたが、従来の図書館サービスもおろそかにしない姿勢に感嘆しました。

また、いかにもアメリカらしいと感じたのは、プロの図書館職員の仕事と人手があれば足りる単純作業が明確に分化されており、単純作業には学生スタッフが充てられていることでした。単純作業とされていたものは貸出・返却作業と書架整理でした。

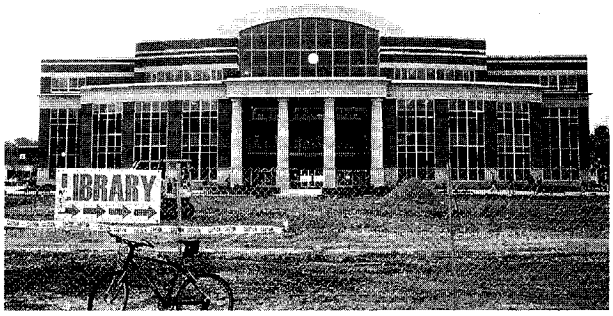
私の仕事にかかわる点では、目録業務も流れ作業で行われており、目録作成と分類を決めることは図


1階製本雑誌の書架と検索用コンピューター

書館職員がしていましたが、装備は学生スタッフがしていました。確認専門の人もいたので、1冊の目録が済むまで4人の手が加わっていました。

基本的な図書館業務は同じですが、MTSU大学図書館のほうが、よりシステマチックに行なわれている点など、違いも感じられました。そうかといえば雑誌価格の高騰など共感する悩みもあり、1誌新規の雑誌を購入するためには、1誌今まで購入していた雑誌を止めなければならないといった話もされていました。

滞在中はあまりの図書館の素晴らしさに圧倒されていたのですが、MTSUに所属する1900人の学生と700人の研究者という数からすると、図書館の規模が小さいのではないだろうか、ということに帰国してから気づきました。それ以外にも、時間的制約と英語能力の限界のために、準備していた質問の半分も聞くことができなかったことなど大いに反省すべき点がありますが、実際にアメリカの大学図書館を訪ね、担当業務の人に話を聞くことができたことは、私自身、図書館サービスの原点に帰って学ぶ良い機会となりました。MTSU大学図書館並みの施設と人員、予算があれば理想ですが、そうでなくても利用者の視点に立ったきめ細かいサービスはぜひとも見習いたいと思います。



図書館正面

図書館は「情報の宝庫」

— カウンターの内側から —

地域政策科学研究科
鈴木　実

福大に来て、図書館のカウンターの仕事をするようになって2年が過ぎました。そのおかげか、自分自身の図書館に対する考え方が、ずいぶんと変わりました。これまでの私の図書館利用の仕方を省みると「ずいぶんと損をしていたなぁ」と感じずにはいられません。

皆さんは図書館が提供してくれるサービスを有効に活用しているでしょうか。「本がねーよ」って言って、あきらめたりしていないでしょうか。もし探しているものが見当たらないときは、福大図書館が他の図書館から借りて、それを皆さんに貸出したり、複写をしてくれたりもするのです。なにかと便利です。皆さんは、図書館が提供するサービスを有効に利用する権利があります。そういったサービスを大いに活用してください。もちろんそのためには、図書館利用のマナーを守るとか、最低限の義務もありますが…。

また、そんなサービスだけでなく、図書館は「情報の宝庫」なのです。ひとつ所に居ながら、関連する情報を芋づる式に捉まえていける場所というのは、他にはなかなかありません。歴史的な知見から最新の情報まで一度に手に入るという、面倒くさがりの人には最適な場所なのです。

つまり図書館は、自分の知識を拡充していく作業、自分の世界観を広げていくことが出来る場所です。レポートを書く、卒論を書くというような特別の時だけに限らず図書館を訪ねてきてください。図書館が提供する豊富な知識と情報に日頃から触れていれば、もっともっと面白い論文なんかが書けると思いますよ。

多くの「モノの見方、感じ方」を知ることは、それだけ自分が豊かになるわけです。本はその手助けをしてくれます。あるモノゴトを、狭量で一面的に捉えていると、対象を十分に理解することが出来なくて、その良さが判らなかったりするかもしれません。それでは世の中面白くありません。日常には面白いことがたくさんあふれています。それを面白いと感じるには豊かな世界観が必要でしょう。図書館を最大限利用して、自分を広げていって下さい。

図書館のカウンターから、微力ながらそのお手伝いをしていきたいと思っています。ただ、すごく難しいことは昼間に行ってください……。

「イギリスの木工雑誌事情」　－図書館紹介にかえて－

教育学部　片野　一

私は1999年10月から2000年８月まで、イギリス南部ハンプシャーにあるハイバリー・U・カレッジの家具デザインおよびメーキング（制作）の研究室に在外研究のために滞在しました。今回「書燈」のために当地の図書館の話題を提供してほしい旨の依頼を受けたのですが、残念なことに、私の滞在のスケジュールに併せるように大掛かりな図書館の改修の時期にあたってしまいました。図書館は学内の講堂に開架図書や雑誌類を移動し、使用上の問題は少なかったのですが、この誌面に通常の図書館の様子をお伝えすることは出来ません。

私は滞在中の多くの時間をワークショップ（工房）で過ごしましたが、この臨時図書館も工房が授業で使用できないときや調べものがあるときに度々利用しました。特に専門関係の雑誌が興味深く日本に紹介されていないものが何冊かありました。イギリスには木工関係の雑誌類が日本に比べると大変多くあります。その事情については後で述べますが、正確な加工技術や工作機械の性能について多くの誌面をさいているものから、展覧会に出品された作家の近作や個展の情報記事を多く扱っているものまで様々です。「木と造形」の話題に対し加工や構造に力点を置くタイプと、デザインや作家的活動の側面に力点を置くタイプの違いかもしれません。

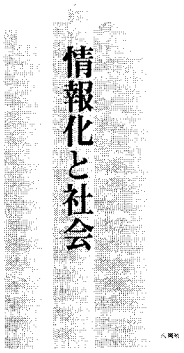
「Wood Worker」という雑誌は、前者の代表的なもので、イギリスで市販されている機械工具の性能試験の結果について誌上採点をする形式でランキング付け（日本のマキタや日立の名前もよく登場してました）をしたり、古い家具の分解工程を細かく紹介する内容などやや辛口の構成です。それに対し後者の代表的なものは「FURNITURE and CABINET MAKING」です。主に創作的な家具の製作法やデザインを多く紹介しています。イギリス人の家具に対する思い入れは大変なもので、家具製作に個人的規模で従事する人の数も多く、コンテストも頻繁に開催されているため、関連記事や写真には困らないようです。この雑誌では、日本の木工道具についての記事もよくあり、特にイギリス人の木工家に好まれる鋸（日本の鋸は手前に引いて使用するため、欧米の押して使用するタイプとは異なりますが、「胴突き」と呼ばれる鋸身の薄いものは細かい作業に適するため重宝される）については、特集記事が組まれていました。上記の雑誌の中間的なもには「Wood Working」があり、楽器の製作法や塗装の仕上げ方といった記事も掲載しています。この他に同じような木工全般を扱ったものが二誌、各論とも言うべき旋盤（回転体）の専門誌やルーターに関する専門誌も数種類あります。なぜこのように日本であまり見かけない木工の専門雑誌が数種類、それも毎月出版されるのか、日本の木工事情を当てはめるとまったく理解しがたいものです。日本では数年前に季刊の木工雑誌が二社より発刊されましたが、現在では一社のみになっています。日本の木工は、世界的にみても水準は高く、欧米の木工家たちは日本の道具や造形に対し大変興味を持っています。記事となる内容もそれなりにあります。但し、日本の伝統的木工は個人一人一人の高い技能を前提としている性格を持つため、専門的に木工に携わる作家や、「生業」としている専業的な木工家だけに関わる話題が多く、将来その道を志す学生や一部の日曜木工家に読者が限定されていることがイギリスでの事情と異なる点です。イギリスでは、もちろん専門家も多いのですが、正式な教育を受けた「専門家予備軍」やハイレベルな日曜木工家、自分の家を修理して楽しむ人などイギリス社会における木工のあり方（労作全般にも共通しますが）を反映して、大変多くの木工人口が存在しています。日本の筒形をした「木工界」に対して、裾野の広い円錐形をした形がイギリスの「木工界」の姿といえます。高い技能も存在しますが、初心者や中級者を対象とした技法の整備や治具（正しく角度を切断したり、同じ規格のものを複数製作するときなどに使用する補助具）の研究、製作も以前から盛んです。様々なレベルの人が比較的よい結果を得られるように技法体系も出来ています。このような事情から記事の内容も一層豊富になるとともに、購買層も日本とは比較にならないほど広いわけです。

私は、日本に帰国後も二種の雑誌を継続購読しています。帰国の少し前にカードで簡単に契約をしてきました。他の書籍類も、初めは近所の本屋で注文していたのですが、あちらのスタッフから通信販売の会社を教えてもらってからはほとんどその会社からの購入で、安く供給してくれますし、支払いもカードによる方法で一度のトラブルもありませんでした。私が求めた本は、日本では手に入りにくい技法書の類とイギリスの伝統木工の歴史に関するもので、この通信販売には大変助かりましたし、その安全性やシステムにも感心しました。ただしカードでの買い物の常ですが、少し買いすぎる懸念があり、帰国のための荷が増えたようです。

最後に話が脱線し、内容も「書燈」に相応しいものか自信がありませんが、外国での本に関する話題と思って読んでもらえれば幸いです。

学内教官著作寄贈図書の紹介

『情報化と社会』　2000.5　東京　八朔社
星野　珙二共編（経済学部教授）



『情報化と社会』という書物をまとめるそもそものきっかけは、1992年から３年間にわたり電気通信普及財団の冠講座として、さまざまな分野の先生方に講義を担当していただいたことがベースになっております。その後この講座は、担当者が替わりながら、共通教育の総合科目として定着しました。そうした経過の中で、情報化についてはそれぞれに専門書が出版されているものの、情報化の進展や社会的影響を広く論じる書物が少ないとの意見が聞かれるようになりました。せっかくバリエーションに富む先生方にその分野の動向をお話いただいているわけですから、新家先生とも相談し、書物に纏めることにいたしました。情報化社会とは何かについて理解を深め、教育や経済との関連性を論議し、インターネット社会のあり方、個人情報の保護、その他新しい技術の動向などを分かりやすく講義調で述べています。どうぞご一読下さい。
（請求番号007.3/A67J　学内刊行物コーナー）

『臨界被曝の衝撃』　2000.4　東京　リベルタ出版
清水　修二共著（経済学部教授）

一昨年東海村で起きたウラン臨界事故は歴史に残る国民的体験でした。現場周辺の住民ばかりでなく、ＴＶの画面をとおして大部分の日本国民が「被曝」の体験を共有したのです。けれどもあの事故の内容や被害の性格といったものを、ちゃんと理解している人がどれだけいるか、実は現在でも怪しいものだと私は思っています。放射能と放射線の区別すらつかない人が実際少なくないのです。この本ではまず、あれがどういう事故だったのか、そしてなぜあんなことが起こったのかをやさしく解説しています。そうして、あの事故から何が見えてくるか、私たちはあの経験から何を学びとるべきかを論じてみました。「いまあらためて問う原子力」という副題をつけた所以です。共著者の野口氏は放射線防護学の専門家で私は社会科学専攻。理系と文系の二人三脚です。臨界事故では２人の尊い命が失われています。彼らの犠牲に報いる道は「学習」以外にないと思います。
（請求番号539.9/SH49R　学内刊行物コーナー）

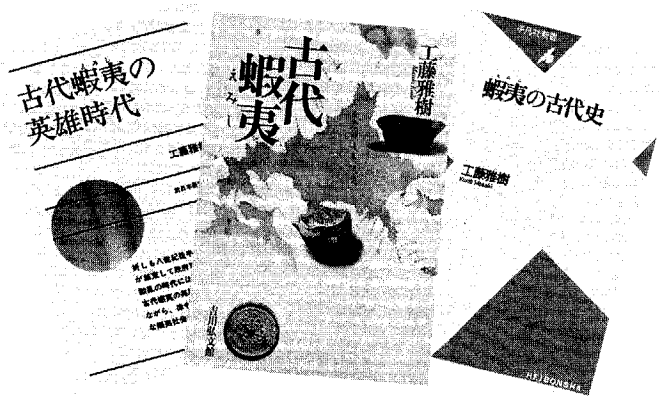
『古代蝦夷（えみし）』　2000.9　東京　吉川弘文館
『古代蝦夷の英雄時代』　2000.11　東京　新日本出版社
『蝦夷の古代史』　2001.1　東京　平凡社
工藤　雅樹著（行政社会学部教授）

私は古代の蝦夷を研究テーマとしている。古代蝦夷については蝦夷アイヌ説と蝦夷辺民説の二説があって、学界では未だ決着をみていない。蝦夷アイヌ説では古代の蝦夷はアイヌにほかならないと主張し、蝦夷辺民説では古代の蝦夷は文化的にも人種の上でも辺境に住む日本人であって、アイヌとは直接の関係はないと説く。したがって蝦夷辺民説は内容的には蝦夷日本人説といいかえることもできる。また古代の蝦夷については、堅いまとまりをもって大和朝廷と対峙していたと考える人がある一方で、何のまとまりもない無知蒙昧な人々であったとする説もあるようである。

私は先に『古代蝦夷』において、蝦夷アイヌ説と蝦夷辺民説の対立は、一方の説に加担して他方の説を論破しようという方向では解決できないこと、また古代蝦夷の社会は部族制社会の特徴を有していることをを述べた。蝦夷アイヌ説が論拠としてきたことにも、蝦夷辺民説の論拠のなかにも、事実として尊重しなければならない点が多々存在すること、また蝦夷社会は集団間の対立が激しかったことをふまえてである。本書は私なりの古代蝦夷の全体像を提示しようとつとめたものである。

その後たまたま二社から古代蝦夷に関する新書の執筆を求められた。そこで『蝦夷の古代史』では、蝦夷アイヌ説と蝦夷辺民説の対立をどう克服するかを中心に置き、私がどのような試行錯誤の後にこのような考え方にたどりついたのかについてもふれてみた。また『古代蝦夷の英雄時代』では、『蝦夷の古代史』で述べたことを要約した上で、古代蝦夷の社会をアイヌ社会やケルト人・ゲルマン人の社会などとも比較しながら、英雄時代という概念をも用い、古代蝦夷の社会は部族社会と考えられることを述べてみた。

二冊の新書ではそれぞれ『古代蝦夷』を執筆した後に考えたことも含めるようにし、また、一般読者を念頭に置いて、できるだけわかりやすく叙述を心がけたつもりである。三書の内容には重複する部分も多いが、それぞれに特色をもたせる試みはしたつもりなので、併読していただければ幸いである。
（請求番号212/KU17K　学内刊行物コーナー）
（　　210.3/KU17K　学内刊行物コーナー）
（　　212/KU17E　学内刊行物コーナー）



【購入資料案内】

ロシアの協同組合運動

総　務　係

19世紀後半から20世紀前半にかけて興隆したロシア協同組合運動関連の文献675タイトルを復刻したものである。これらの文献の中には、N.D.Kondrt'ev、N.P.Makarov、A.N.Chelintsev、A.F.Fortunatov、A.G.Doiarenkovといった錚々たる面々の著作、運動参加者への手引書、組合指導者やメンバーの残したノート、協同組合に関する法律集、定期刊行物、統計刊行物、書誌などが含まれている。当時の協同組合の日常的活動内容やこれらの組合を取り巻く社会状況などが克明に描き出されている。

ロシア経済・社会史の研究にとってはもちろんのこと、今日における社会運動との比較考察などを行うにあたっても貴重な知見をもたらす資料集成である。

特殊資料の遡及と件名検索について

情報管理係

電算化以前の特殊資料を遡及しています。特殊資料とは、図書や雑誌以外の資料を総称して呼んでいます。地図、楽譜、スライド、録音テープ、レコード、ビデオテープ、CD、CD－ROM、フロッピーディスク、マイクロフィルム、マイクロフィッシュ等があります。

また、件名検索対象資料を大幅に増やしました。件名検索語とは、図書館資料が扱っている主題を表した名辞＜件名＞を検索語としたものです。

例）児童心理学、幼児、教育学、経済史、地理学、英米文学など。

図書データベース登録件数

対象数612,684冊（平成13年２月末現在）			
データ登録済　合計535,519冊　87.4%			データ未登録 12.6%
1975年度以前登録済	1976-87年度登録済	1988年度以降登録済	未登録
189,880	174,001	171,638	77,165
31.0%	28.4%	28.0%	12.6%

東北地区国立大学図書館間の学生証による相互利用について

情報サービス係

学部学生が、他の大学図書館に直接出向き利用する場合は、図書館長発行の紹介状を利用受入館に提出することとなっていますが、平成12年12月から東北地区国立大学図書館を利用する際は、学生証を提示することにより、利用可能となりました。長期休業期間中など郷里に戻った時、近くの国立大学図書館も利用されることをお勧めします。

なお、東北地区国立大学図書館以外の大学図書館を利用する際は、従来どおり図書館長発行の紹介状が必要です。

目　次

・海外旅行で図書館へ行く……大黒太郎(1)
・「大塚文庫」のこと……樋口　徹(2)
・思い出の一冊……柴原哲太郎(3)
・アメリカ大学図書館事情
　ミドルテネシー州立大学大学図書館を訪ねて
　…白田真紀子(4)
・図書館は「情報の宝庫」
　—カウンターの内側から—……鈴木　実(5)
・「イギリスの木工雑誌事情」
　—図書館紹介にかえて—……片野　一(6)
・学内教官著作寄贈図書の紹介
　「情報化と社会」……星野珙二(7)
　「臨界被曝の衝撃」……清水修二(7)
　「古代蝦夷」「古代蝦夷の英雄時代」
　「蝦夷の古代史」……工藤雅樹(7)
・購入資料案内
　ロシアの協同組合運動……総務係(8)
・特殊資料の遡及と件名検索について…情報管理係(8)
・東北地区国立大学図書館間の学生証による
　相互利用について……情報サービス係(8)